

上下心目ヲ驚シ畢ヌ、

〔守貞漫稿 二十六〕十五日○正ノ夜諸川岸焚之。○注門松、彼童夜中、牛房注連等ヲ以テ、或ハ地ヲ撲チ、

或ハ民戸ヲ撲等シテ、トンドジャ、チャンギリコジヤト報告シ巡ル、蓋焚之ニハ雇夫等出テ助之

テ、兒童ノミニハ非ズ、彼輩今夜寢ザルユヘニ、夜不寢講ト云リ、ヨチンカウト訓ゼリ、チャンギリ

コハ左義長ノ訛ナラン、江戸ニハ更ニ無此事、或ハ川ニ流シ、或ハ家ニテ焚之、或ハ芥溜へ捨之ノ

〔年中行事故實考 正月〕三毬打 信州松本町にては、町々辻の中央、長さ拾間計の竹を立、松竹をか

ざり、御柱といふ、童部どもあつまり、一人を別當と名づけ、水あひせなどして、其柱の下にて襷を

なす、是三毬打の遺風にや、我府下にまん竹と名附、大竹を立るも、三毬打の遺風也とぞ、

〔事實文編附録 十六〕福山爆竹圖卷序

空疎陳人

邦俗爆竹以正月十四日、而吾福山之觀、號稱第一、未聞他方有此比也、其製植巨竹四竿、竿頭合束爲

尖、四脚隨下、隨張衣以草藁、形如四注屋、而耀且聳焉、高殆三丈、而置如梳斗者、松葉作之、其上又施諸

樣、黃飾或飛鳥、或走獸、自花卉樹石至宮室舟車器械、凡百形狀、無所不有、而一株竹葉、裊々拂雲、府下

三十街、爆竹二十五本、市人昇之、自城北始、轉循東濠、涉街衢、鼓譟、騷呼、逐隊以行、終至城南、蘆田川上

火之、火烈既揚、藩士年少各著鎮火衣、跨馬鳴鞭、直入煙火中、縱橫馳突、沙石皆飛、而觀者喝采不已、無

論府下士民、自四方隣國來、雜沓亂簇、不知幾萬人也、二十五本已爲灰燼、日暮人散、是爲歲例、街長三

好光諄作圖卷、就求余序、余意爆竹之舉、泛然見之、無用遊戲、徒費貨財、然國有紀律、民守儉素、如彼黃

飾、爲觀美者、惟用紙麻草藁、不敢廁一片金帛、且藩士年少、藉以講武事、亦足觀國光矣、乃叙事略與之、

安政六己未年正月、

〔看聞日記〕永享六年正月十五日、三球杖面々進、前宰相三本、源宰相三本、隆富三本、入夜木守參燒三球杖

爆竹停止